

図書館は「知」の拠点

私にとって図書館は身近な存在だ。お小遣いで買える本には限りがあり、学生の頃は時間も忘れて読みふけていた。また、さまざまな作家との出会いをくれたかけがえのない場所でもある。

しかし、文字離れが進み、電子書籍が普及するなかで、最近では図書館を不要とする声も聞かれる。2019年度の三重県立図書館の来館者数は27万人で、15年度と比較して15・7%の減少となった。20年度はコロナ禍で図書館離れが一段と進んだ。書籍そのものが不特定多数の人が触れる共有物であり、来館を前提としていることが要因になっている。

そのようななか、図書館を訪れることの楽しさや、司書と利用者のつながりを少しでも感じてもらうため、全国ではユニークな取組が行われている。栗東市立図書館（滋賀県）で行われた「一行の図書館」。タイトルやジャンルが分からないように包まれた本に、司書が選んだ本のなかの一行が記載されている。利用者はその一行をヒントに本を選ぶ仕組みで、短い滞在時間の中で新たなジャンルの本との出会いを提供している。

また、全国の複数の図書館で開催されている「ぬいぐるみの図書館お泊り会」は、子どもの代わりに子どものお気に入りのぬいぐるみが図書館に「お泊り」する。司書が事前にヒアリングした子どもの好みに応じて選んだ本をぬいぐるみが選んだ本として貸し出すことで図書館を身近に感じてもらう取り組みだ。以前から実施されている取組だが、コロナ禍でお泊り需要が高まっているとのことだ。

三重県内の図書館でも会員制交流サイト（SNS）を活用して司書がおすすめの本を紹介したり、「蔵書点検」など、普段見ることができない図書館の裏側の作業を公開したりして図書館への関心を高める工夫を進めている。

図書館は、誰もが「無料」で、「自由」に知識と触れ合うことができる場であり、地域における知の拠点として果たす役割は大きいと考える。これからも新たな「知」との出会いを楽しみにしたい。

（コンサルティング事業部 調査グループ 主任研究員 山崎 美幸）